

映像作品『絆～MEGASH～』

荒谷 元気 江口 慧 後藤 徹 清水 天志
堀 吉成 森井 康成

(深井 勉ゼミ)

はじめに

大学生活というのは義務教育期間に比べて、はるかに自由度の高い期間です。興味のあることをとことん追求できるという素晴らしい期間です。また、新しく多くの人達と出会い、親交を深めていくことができる期間でもあります。

私たちは多くの選択肢の中から映像作品を制作するという道を選びました。そしてこのメンバーが集まりました。各々それぞれが映像について学び、また人生についても学び、4年前と比べて一段と成長したと思います。

この作品は、そんな私たちの4年間の集大成の作品です。

制作意図

私たちが、映像作品「絆～MEGASH～」を制作した意図は、まずメンバーの仲間意識が高く、卒業研究として何か作品として形に残したかったからです。

なぜ、プロモーションビデオにしたのか？

制作スタッフ内にプロを目指しているシンガーソングライターがいたので、まず始めにこの案が出ました。その音楽センスには他のスタッフも脱帽してしまう程で、なぜ音楽学校に行かなかったのか不思議で仕方がない程でした。

しかしなぜ、音楽学校に進まなかったのかと尋ねると、自分に自信が無かったからだと答えていました。

彼の書く歌詞や曲には、他の人を惹き付けて虜にする力があります。特に同世代ということもあり、等身大の自分を思わず連想してしまい、とても共感できる歌です。そこで、シャイなシンガーソングライターを後押しするためや、なんとか、

他の人たちにもこの歌を聴いてもらうためにプロモーションビデオを選択しました。その他にも、ドラマという案も出ましたが、多数決の結果、僅差でプロモーションビデオになりましたが、ドラマ案を無くしてしまうには惜しいので、ドラマをプロモーションビデオの中に取り入れてみました。「絆～MEGASH～」となるまでの経緯…

偶然にも私たちはここ京都学園大学の同じゼミで巡り会ってしまいました。人の出会いは一期一会で、私たちが会ったのも奇跡のような確率です。

映像制作を通じて、皆で一つの作品を作る楽しさと喜びを覚えました。幾度とないメンバー内の衝突もありましたが、その壁を乗り越えたことで、さらに絆が深まりました。そして、表現上の制約という枠にとらわれないで、自由にモノを作ることコンセプトに「絆～MEGASH～」制作チームが結成されました。

制作スケジュール

2008年10月	・企画考案 ・歌詞作成 ・曲作成 ・構成原稿作成
11月	・撮影開始 ・大学内で撮影 ・大学外での撮影 ・備品購入（撮影で必要なもの）
12月	・編集 ・キャプション原稿作成
2009年1月	・作品完成

企画考案に最も時間を費やしました。制作時間の半分以上は企画会議でした。良い卒業作品を作りたいという各々の思いがぶつかり、なかなかまとまりませんでした。ある者は思い出がテーマの

作品に、ある者はドラマ、またある者はプロモーションビデオなど、複数の良案が出ました。話し合っていくうちに制作意図でも述べたように一人の青年の夢を後押しするのが最も良いという形になりました。そこにそれぞれの良案を足していった結果、下記のような作品ができあがりました。

作品概要

本作品は、大学4年間のメンバーとの「仲間の絆」をテーマにしたプロモーションビデオです。ストーリーはチームのメンバーが卒業してそれぞれが違う道を歩いていた。仕事も違えば住んでいる地域も違う。ある日、卒業後にシンガーソングライターを目指していたメンバーの堀君が路上でライブをすることになり、メンバーに自分のライブを見に来て欲しいと勧誘をする。しかし、ライブ当日にとんでもない結末が待ち受けていようとはこのとき彼は知らなかった……。果たしてメンバーは来てくれるのか！それとも……。

大学4年間での「仲間の絆」が生んだ心温まる作品になっています。

- 1 堀君がメンバーに路上ライブを見に来てほしいと勧誘をする。
- 2 曲が始まる。
- 3 メンバーが集まる。
- 4 メンバーが堀君のためにケーキを買う。
- 5 堀君の路上ライブ。だがメンバーは来ない……。
- 6 堀君が家に帰宅。
- 7 メンバーが堀君の家に集結。
- 8 堀君の誕生日を祝う。
- 9 エンディング

以上が大まかな作品の展開です。じつはこのプロモーションビデオは謎解きとなっています。1度見ただけでは理解ができないはずです。そこで画像つきでもう少し詳しく解説します。



堀君が大学生活でメンバーと過ごした写真を懐かしんでいる写真。ここに写っているのが今回の制作メンバー全員です。ちなみに下段中央が主人公の堀君です。



たまたま堀君の家に遊びに来ていた後藤君が、堀君から路上ライブをするので仲間を呼んでくれと頼まれます。これは後藤君からメンバーに送信されたメールです。文章の最後に口ウソクとケーキの絵文字が記されています。



路上ライブ開始！だが、メンバーは来てくれません……。

このあとメンバーが来てくれるのを祈って歌い続けるのですが……。

映像作品『絆～MEGASH～』



そのころメンバーは、路上ライブに行けないため、多少の罪悪感はあるものの、堀君の誕生日を祝うサプライズを実行するためにプレゼントを買っていたのです。全員集合して堀君の家へ向かいます。



堀君の家で誕生日パーティの準備をするメンバー。堀君が路上ライブから帰ってくるのを待っています。

この写真には“HAPPY BIRTHDAY”と書かれた置物が写っていますが、映像になると速すぎて見えません。まだタネ明かしをしたくないという編集担当の気持ちが伺えます。



堀君が路上ライブから家に帰ってきます。メン

バーが来てくれなかったため、少し寂しそうな様子。このあと自分の部屋にメンバー達が待っているとは知るよしもなく重い足取りで階段を上っています。



誕生日を祝福している様子。サンタの帽子や首飾り、シャンパンやケーキなどで祝っています。まさかの展開に堀君はすぐに理解できず戸惑っています。感激していますが、あまりの突然の出来事に状況を把握しきれれていません。



状況を把握できた堀君は、メンバーからリクエストを受けて歌で恩返しをしています。

路上ライブより楽しそうな様子が伺えます。

以上、画像つきで説明をしたシーンがこの作品の謎を解くカギとなっています。

なぜこのような理解しにくい表現方法を使ったのかというと、これこそが真のテーマだからです。いわゆる“視聴者へのサプライズ”を目的としていたからです。「絆」は私達のテーマにしかすぎません。視聴者にはただ絆をテーマとした映像を流していただければつまらないだろうと思うので「驚ろかして面白くしてやろう」。そういうエンターテイナーの心を持っているのがこのメンバーの特長です。また、人の脳はインパクトの強いものをより長く記憶します。その特性を生かし、視聴者のなかにいつまでも残る作品を作ろうというのが私達の狙いだったのです。

歌詞

退屈な毎日

不安な日々を過ごしたけど

強くしてくれた仲間が存在

これからは 頑張れる気がした

素直になれない互いの夢も

気づけばなんとなく大人になっていく

そんな日々が幸せでした

変わらないもの

それは仲間との絆だけだった

忙しくても心だけは忘れないで

いつか会おうって祈ったよ

これからも幸せで

My Friend

何でも言い合える友達

それに感謝できました

朝まで語り合った仲

その事実には嘘はないから

春がきて真夜中の景色

もう会えないの？と寂しくなる

それでも進む心の葛藤

消せるわけないよ

それは大切な思い出だから

卒業それはサヨナラから始まる物語

いつかまた会う日まで

これからも幸せで

My Friend

電車でした土下座 食堂でした恋も 車で聞いた音楽も

思いどおりに動かないバイク

すべてすべて思い出となる

変わらないもの

それは仲間との絆だけだった

忙しくても心だけは忘れないで

いつか会おうって祈ったよ

これからも幸せで

My Friend

消せるわけないよ

それは大切な思い出だから

卒業それはサヨナラから始まる物語

いつかまた会う日まで

これからも幸せで

My Friend

作詞は堀君と森井君の共同作品です。シンプルで伝わりやすい歌詞となっています。

つまり、この歌詞で伝えたいことは、一度できた絆は何があっても変わらない。これから先、何があってもいつまでも友達さ。という意味が込められています。ちなみに歌詞の中にはメンバーそれぞれの実話が含まれています。

制作側の記録

① 撮影の記録

テーマが「絆」と決まり、構成を行い撮影に取り組むも、天候やチームのメンバーの日程がなかなか合わず、撮りたい映像を撮ることができませんでした。

しかし、いざ、撮った映像を見てみるとイメージしていた以上に、良い映像を撮ることができていました。当初は、構成の都合上メンバー全員が

作品に登場するのは難しかったのですが、堀君の「せっかくの卒業制作やし、みんな出たほうがいいと思う」の一言で、撮影しながら少しずつ構成を練り直し、なんとかメンバー全員が出演することができました。

カメラワークへのこだわりや、メンバー一人一人の個性を最大限に引き出す演出など、撮影終了時にはメンバー全員が持てる力を出し切り納得のいく作品になりました。

② 映像編集の記録

いざ編集に入りいきなり困難に陥りました。それはパソコンに映像を取り込む作業のときです。同じ角度からの映像や同じ演出など、似たような絵柄が多かったことです。このため、100分は撮った映像のうち使用できそうな映像は10分もなく、素材の少なさに悩みました。さらに、堀君以外のメンバーの映像が少なすぎてストーリーが繋がりにくい部分が多々ありました。そこは本編とは関係のない遊びカットとして撮った映像を使用し、強引に繋ぐことができました。やや寂しい映像にメリハリをつけるためエフェクトを多用しました。しかし、デフォルト以外に曲調に合うものが無く、結局似たようなエフェクトになってしまい、技術力の低さを反省しております。一つ一つの映像はよかったのですが、バリエーションの少なさが最大の反省点です。

映像作品を作るにあたって大切なのは、頭の中に映像のストーリーをしっかりと固めて、様々なバリエーションの映像を撮っていくことが大切だとわかりました。

メンバーそれぞれの本音

今回の卒業制作を体験して学んだことなどを自由に書きました。ここからメンバーも知らない本音が読み取れます。

堀 吉成

卒業制作を通して、いろいろな事を学べたと感じています。卒業制作はPVですが、普段から皆でひとつの物を作るという経験があまりなかった為、そこに苦勞しました。しかし、その苦勞が楽しみでもあったように思えます。

普段から趣味で作詞作曲をしています、いつ

も以上に気合いを入れて曲作りに励みました。皆で作る卒業制作ということもあって、さらに作曲に関するテクニックを使ったりと、初めての事にもたくさん挑戦しました。この気持は私一人が作ったものではなくて、仲間が私に「音楽」という大事なパートを任せてくれたからできたものです。その期待は決して裏切れないと思い作曲に励みました。

卒業制作を振り返ってみると、今回のメンバーが一人でも欠けていたら、この作品は成り立っていなかったと感じています。それぞれの個性がぶつかり合う中で最後まで、やり抜き通せたのは、この仲間だったからだと思います。卒業制作をやって心からよかったと思っています。私の一生の大切な宝物にもなりました、それに大切な経験ができて嬉しく思っています。

清水 天志

私は、カメラ撮影を主にやりました。型にはまった取材の撮影とは違い、動いているものを撮影したり、自分の感性で撮ったりと、今まで以上に、技術やセンスが用いられる作業でした。基本的には、撮影監督の荒谷君の指示で、撮影していました。監督の気持ちに、精一杯応えられるように、必死でカメラを回していました。それ以上に、難しかったのは自由に撮影する時でした。無駄な撮影はしたくなかったので、監督に使ってほしいという気持ちで、自分のセンスで撮影しました。編集で、自分が自由に撮影した部分が使われた時は、泣きそうなくらいに感動しました。

一番難しかったサプライズの場面は、うまく表現できたと思います。撮影を進めていく中で、メンバー同士の衝突が何度かあり、制作中止になりかけました。しかし、そのおかげで、さらに仲間意識が芽生え、この作品のテーマである「絆」が、改めて感じられた卒業作品でした。本当に良かったです。

森井 康成

卒業するにあたり、自分たちらしさを出すためにあえて難易度の高い作品を作り上げたいという思いが強く、企画で2週間ほど悩んだ結果、曲を一から作り、その曲でプロモーションビデオを作

ることにしました。まずは曲作りからということで、歌詞を作って曲を作ることになりました。歌詞のテーマは「仲間の絆」をテーマ、素直な言葉を紙に書いて、それからその言葉をつなげていきました。私は歌詞を作るとき、仲間と過ごした日々を思い出し、そのとき楽しかったことや、卒業して今より会うのが難しくなる寂しさなど、過去の思い出と現在の心境を言葉にしたので、すぐに歌詞を完成させることができました。

その後、曲を作って撮影に入るまでに長い時間がかかりましたが、撮影は順調に進むことができました。撮影に入るまでは私を含めメンバーの卒業制作に対する思いや意欲を余り感じるできませんでした。撮影に入ると、全員が良い作品を作りたいという意欲が沸いてきて、大学4年間の集大成の作品に仕上げることができたと思います。

江口 慧

夏休みが終わり、いざ卒業制作へ。皆で企画を考えるもなかなか進展しませんでした。集まるだけで何も決まらない日もありました。何度か話し合いをする中で決まった企画がPV制作です。テーマが「絆」に決まり、実際に制作がスタートするまでにどれほど時間を費やしたのでしょうか。

撮影に入ると企画会議の時とは違い、スムーズに進行していきました。しかし辛いこともありました。季節感を合わせるために、寒さが増す中でも薄着。撮影を待っている時は、特に寒かったです。

撮影の最後、パーティのシーンのために皆で装飾品やケーキなどを買い、ケーキのデコレーションも、自分たちで行いました。まさに男の料理って感じでした。皆のテンションがあがり、いよいよシャンパンをあけます。予想通りに床にこぼれ落ちてしまいました。今までのテンションが嘘であったかのように静まりました。それでも撮影が終われば、皆、笑顔です。PVのテーマである「絆」がまた一つ深く結ばれた感じでした。

卒業制作を通して、改めて仲間のすごさを知り、尊敬しました。卒業し、それぞれの道に進むが、ここでの「絆」は変わることはないと思います。

後藤 徹

今まで、2年間ゼミで勉強してきたことの集大成としていい卒業制作が出来ました。

それまで、意識せずに見ていたテレビや映像を見る側から作る側になったことで、撮影時に前のカットとは違う角度で撮り、またどのように撮ればマンネリがなく良い映像を撮られるかということに今回は力点を置きました。

人が一人一人違うように、次に撮りたい映像のイメージの違いがあり、その場で意見交換することで、一人ずつがイメージしていたモノよりも良い映像が撮れました。

時には、ケンカ等もありましたが、それは皆が卒業制作に対する熱い情熱同士のぶつかり合いであり、気まずい時もありましたが、このおかげで、さらに一致団結できいい作品が出来上がったと思います。

今回は、プロモーションビデオということで、この為だけに堀君が曲を作り、森井君が詞を書いてくれました。詞の内容も友達との絆を題材として、卒業制作を通して改めて友達のすばらしさに気づき、それを全面に押し出したプロモーションビデオに仕上がりました。

荒谷 元気

卒業作品は最高のものを作りたい、これが本音です。だからメンバーは最高のアイデアと情熱を持っている人達に声をかけ、自ら選抜しました。それだけ私は本気だったのです。普段はリーダーシップを苦手とする私ですが、今回は積極的に行動しました。構成、演出、カメラワーク、編集、撮影スケジュールまで担当しました。すべては堀君の夢の後押しのため、メンバー全員にこのチームで作品を作って良かったと思ってもらえるために手を尽くしました。初めのうちはメンバーの何人かとは温度差がありましたが、それも日が立つにつれて解決し、チーム一丸となり同じ方向を向いて制作をしてくれました。不器用で慣れないリーダーシップの性でメンバーには迷惑をかけたかもしれませんが、そんな私をみんなは支えてくれました。これこそが友情の絆です。そんなメンバーそれぞれの良さを編集でしっかりと表現しました。

曲のイメージを崩さずシンプルで見やすくかつ、

映像作品『絆～MEGASH～』

遊びを入れた自信作になりました。このメンバーを選んで正解でした。

スタッフ紹介

監督…荒谷元気

出演…堀吉成

森井康成

後藤徹

江口慧

荒谷元気

清水天志

撮影…清水天志

編集…荒谷元気

企画…後藤徹

美術…森井康成

ディレクター…江口慧

主題歌

「MY FRIEND ～仲間と出逢えた場所～」

撮影協力…京都学園大学

パーシモン2

亀岡サティ前

最後に

私たちは、大学に入るまでは「卒業研究」とは、一人で行うものだと思っていました。

しかし、ゼミで「グループ制作可」と聞き、今までの「卒業研究」の難しいイメージが一気になりました。それと同時に、「卒業研究」に対するアイデアが数えきれないほど湧き出てきました。同じゼミ内の仲間でそのいくつかを話し合おうと、それぞれに制作に対する熱い気持ちを持っていることが確認できました。そして、私たちは、互いに「こいつらとなら最高の作品が出来る」と確信しました。

周りにどう思われたっていい、自分たちが今出来る最高のパフォーマンスをすればいいんだという気持ちで制作に挑みました。

制作にかけた時間はそれほど長くありません。普通なら、もっと時間をかけなければならないのかもしれないのですが、私たちは、そのような時間はいらなかったのです。なぜならば、全員気持ち一つになっていたからです。メンバーの一人一人が他のメンバーにはない個性を持ち、誰一人

欠けてはならない重要な役割をそれぞれが知らず知らずの間に持っていました。

振り返ってみれば私たちの出会いも奇跡的でした。あの時、あの場所で、あのような事をしていなければ、この出会いはなかったのです。これは誰もが経験していることだと思います。だからこそこの当たり前なことを、私たちは映像という誰にでもわかりやすく観られる表現方法で伝えたかったのです。

この作品を観て、賛否両論あるかも知れませんが、それは自由だと思います。

なぜなら、私たちも映像という場を借りて「自由」に表現しているからです。

私たちはこの作品で「仲間の絆」を精一杯伝えたつもりです。中には、作品を観ても全く伝わらない人もいます。そのような人たち、作品を観てくれた全ての人たちに、私たちはこれから語り継いでいきたいと思っています。

～仲間って良いものですよ～

